

福沢諭吉、学問のすすめで統計の重要性を主張

奥積 雅彦（国立国会図書館支部総務省統計図書館長）

筆者は統計資料館で行う明治 150 年記念事業に関わることとなり、明治期に出版された福沢諭吉の著書において、統計に関する用語がどのように表記されているかについては、統計図書館ミニトピックスNo.2で紹介したところです。

今回は、明治7年(1874年)出版の「学問のすすめ(第13編 怨望の人間に害あるを論ず)」において、具体的にどのように統計の重要性の主張をしているかについて紹介します。

1 「学問のすすめ」とは

慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション(デジタルで読む福沢諭吉)における「学問のすすめ」の説明によれば、「福沢の著述家としての態度に一転機^{かく}を劃した代表的著作である。それまでの福沢は西洋の文物制度学術の客観的紹介者としての態度を持し、福沢のこ



福沢諭吉¹(1835～1901)



「学問のすすめ(初編)」²

とばを借りて言えば、『言はば文明一節づつの切り売り』をしていたのであるが、明治政府の施政方針も改進々歩の方向に定まり、新日本の進路の見きわめもついたので、従来の態度を一擲^{いってき}して、すこぶる大胆な態度で、旧思想の批判、新文明の鼓吹に乗り出した。その第一声ともいべきものが、この「学問のすすめ」十七編のパンフレット・キャンペーンであった。」とされています。「学問のすすめ」は、明治5年(1872年)から明治9年にかけて17編が逐次出版されました。

2 「学問のすすめ」における統計の重要性の主張

「学問のすすめ(第13編 怨望の人間に害あるを論ず)」において統計の重要性を主張しているくだりは、別記のとおりです。参考までに、筆者が現代文に書き下ろしたものを添えました。

その中で、人間の怨望(うらみに思うこと)に関する例として、統計があれば、御殿と世間における悪事を比較することができ、どちらが多いか(有意な差があるか)ははっきりするということを示唆しています。これは、統計的なものの見方の重要性を説くものともみることができま

¹ 【写真】: 国立国会図書館 HP 「近代日本人の肖像」

² 【資料】: 国立国会図書館デジタルコレクション

【別記】「学問のすすめ（第13編）」（抄）

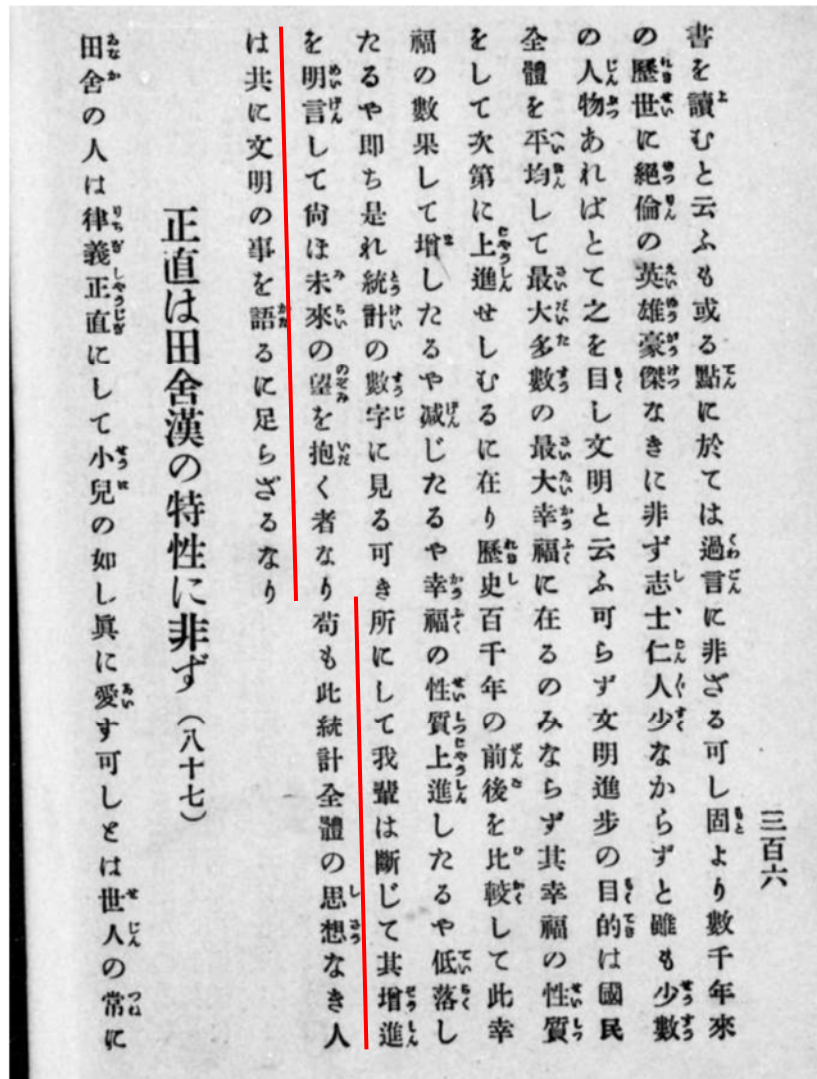
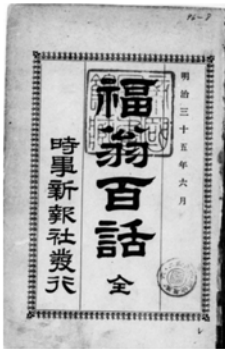
原文 ³ をひらがな表記にし、句読点を加えたもの	現代文への書き下ろし
<p>又近く一例を挙げて示さんに、怨望の流行して交際を害したるものは、我封建の時代に沢山なる大名の御殿女中を以て最とす。</p>	<p>また、身近なところでの一例をあげて示すと、うらみに思うことが流行して交際を害しているものは、我らが封建の時代にたくさんの大名が御殿と女中を抱えていたことが最たるものである。</p>
<p>抑も御殿の大略を云えば、無識無学の婦女子群居して、無智無徳の一主人に仕え、勉強を以て賞せらるゝに非ず、懶惰に由て罰せらるゝに非ず、諫て叱らるゝこともあり、諫めずして叱らるゝこともあり、言うも善し言わざるも善し、詐るも悪し詐らざるも悪し、唯朝夕の臨機応変にて主人の寵愛を僥倖するのみ。</p>	<p>そもそも、御殿のことを大まかに言えば、無識無学の婦女子が群居して、無知で品のない一主人に仕え、勉強で賞せられるのではなく、怠惰によって罰せられるのでもなく、いさめて、叱られることもあり、いさめずに叱られることもあり、言っても良いし言わなくても良い、偽るのも悪く、偽らないのも悪く、ただ朝から晩まで、臨機応変に主人からの寵愛だけを思いがけない幸いとするようなものであった。</p>
<p>その状恰も的なきに射るが如く中たるも巧なるに非ず、中たらざるも拙なるに非ず、正に之を人間外の一乾坤と云うも可なり。</p>	<p>その状況は、あたかも的のないところに矢を射るようなものであり、命中して上手ということでもなく、当たらなくても下手ということでもなくて、まさにこれを、運を天に任せて、のるかそるかの大勝負ということもできる。</p>
<p>この有様の内に居れば、喜怒哀楽の心情必ずその性を変じて、他の人間世界に異ならざるを得ず。</p>	<p>この境遇の中にいると、喜怒哀楽の心情は必ずおかしくなってしまうと、他の人間世界とは違うようになってしまわざるを得ない。</p>
<p>遇ま朋輩に立身する者あるも、その立身の方法を学ぶに由なければ、唯これを羨むのみ。</p>	<p>たまたま同僚で出世する人があったとしても、どのように出世したのか、学ぶ理由がないのであれば、ただこれを羨むのみである。</p>
<p>之を羨むの余には、唯これを嫉むのみ。</p>	<p>この羨むことは、ただ妬みとなるものである。</p>
<p>朋輩を嫉み主人を怨望するに忙わしければ何ぞ御家の御ためを思うに違あらん。</p>	<p>同僚を妬んで主人をうらみに思うことに忙しく、御家のことを考えている暇はないだろう。</p>
<p>忠信節義は表向の挨拶のみにて、その実は量に油をこぼしても、人の見ぬ所なれば拭いもせずと捨置く流儀と為り、甚しきは主人の一命に掛る病の時にも、平生朋輩の睨合いにからまりて、思うまゝに看病をも為し得ざる者多し。</p>	<p>忠信忠節は儀礼的な挨拶のみとなってしまう、実際には量に油をこぼしても、人が見ていなければ拭いもせずとそのままにしておくような流儀となり、極端な例では、主人の一命にかかる病の時にも、平生の同僚同士のにらみ合いが絡まって、思うように看病もできないことが多い。</p>
<p>尚一步を進めて怨望嫉妬の極度に至ては、毒害の沙汰も稀にはなきに非ず。</p>	<p>なお、一步進めて、うらみに思うことや嫉妬の極度に至っては、毒殺の沙汰も珍しいことではない。</p>
<p>古来若しこの大悪事に付きその数を記したる「スタチスチク」の表ありて御殿に行われたる毒害の数と、世間に行われたる毒害の数とを比較することあらば、御殿に悪事の盛なること断じて知るべし。</p>	<p>もし、昔からこの大悪事について、その数を記した「スタチスチク(Statistics【統計】)」の表があって、御殿で行われた毒殺の件数と、世間で行われた毒殺の件数とを比較することができたならば、御殿での悪事が盛んであることが確信できるだろう。</p>

³【参考資料】慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション（デジタルで読む福澤諭吉）「学問のすすめ」

3 おわりに

「学問のすすめ」といえば「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」で有名ですが、国民に自立を、また、文明開化を通じて人々の意識改革を促し、日本の未来を創造しようとしたように思います。ちなみに、「学問のすすめ（第 13 編 怨望の人間に害あるを論ず）」のほか、明治 30 年(1897 年)出版の「福翁百話」において「苟もこの統計全体の思想なき人は共に文明の事を語るに足らざるなり。」とまで断じていることから、福沢の統計に対する熱い思いが伝わってきます。

● 「福翁百話」⁴



【注】慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション（デジタルで読む福澤諭吉）における「福翁百話」の説明によれば、「福沢が随時、客と談話した話題を書きとめておいたものの中から百題を選んで取りまとめたもの。明治 28 年中に百編を脱稿・・・。」とされています。

⁴ 【資料】：国立国会図書館デジタルコレクション